

槐かい

岡井省二創刊

平成22年5月号

平成二十二年五月一日発行 第二十五巻第五号 清色第三十七号（毎月一回一日発行）
平成二十二年九月十八日第三種郵便物認可



春

天

『俳句四季』 三月号より

高橋将夫

花を見るために生まれてきたるなり

砂の海石の山へと春の蝶

地虫出てここでよかつたかと思ふ

若駒の見てゐるはるかかなたかな

いささかのズレにはじまる雪崩かな
追ひ風を喜びもせず風車
山笑ひをるがごとくに指揮者の背
春障子力を抜いて引きにけり
深海の命は光る春の星
人生は垣繕ひの繰り返し
春天は混沌として模糊として

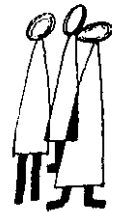
槐安集

水野恒彦

何を焚く炎ほむらや眠る白鳥に
寒鴉鳴き崖がしづかに応へをり
梟の常闇父に句集あり
阿修羅像見て渴きをり雪の果
檣灯の岬を過り春近し

延広禎一

まんぼうの潮目ただよふ春愁
万華鏡に大仏在す春日かな
舞殿をちやり場としたる恋の猫
身の内ちやり場に鶴棲まひをる臍はらかな
千枚漬千の面に和楽ある



加藤みき

乳いろの空に仰げり榛の花
春泥の水玉模様ハイソックス
鞆たもとや夕方の星揃ひたる
スピーカーの鶯のこゑ朗朗と
諸葛菜海はすつかり空いろに

石脇みはる

目ばかりがもの言うてをる螢鳥賊
富士山にブラックホール春の夢
春浅き葉草園にこゑのあり
花の山大風呂敷を広げけり
蜜蝋のかたまつてをりチューリップ

中島陽華

八衢に先生のこゑ春の虹
おおふろしき敷くや椿の蜜吸はむ
校門に桜咲きたる双子かな
春濤や揚げられてをるとらうつぼ
杖白し造り酒屋のひなまつり

栗栖恵通子

空海の二の腕太き雨水かな
きさらぎの紫袷紗たたみをり
啓蟄の小尻隠してをりにける
届け出は父とありける春の虹
クリームトとシーレと夜の忘れ雪

竹内悦子

正月の男の畳草履かな
菩提樹に蝶触れてゆく昼の月
朧夜の鬼面の衆の乱れ打ち
叩かれて春の一撓太鼓かな
八角の桧の湯舟燕来る

大島翠木

白みなぎる寒の牡丹を覗きけり
大寺の蛇口の勢ひ葦の角
春一番二番やひかり野に山に
穂の芽や生くるも運もほつほと
鳥の恋乾きし胸のふかきまで

雨村敏子

砂時計砂ひと粒の二月かな
涅槃西風さらさらと菜を洗ひをり
耳飾り鏡の中の余寒かな
うすらひの音を聞きたく産土に
万華鏡日替りの夢の断かけら片

小形さとる

きさらぎや翁嫗に羽音ある
ねこやなぎ戌亥の風をよろこべり
丹田の真中の春となりにけり
家元の左の眉が春の沼
聖ひじり一人吸うて臍の峠口

本多俊子

愛といふ母音のひびき春きざす
あしかびや幻の声よみがへる
利休忌や夜さは雨の音となり
塩の道大内雛のこゑすなり
はすかいに神の石段鳥交る

久津見風牛

浮寝鳥寝顔かくしてゐたりけり
春耕の鋤に刃向ふ音のあり
傍に犁置き二月の牛眠る
鴨群れの渦巻きほぐすがひあり
雪搔きにまぎれてをりし油売り

近藤 きくえ

地の匂ひ日の匂ひこめ耕せる
川風にかたさ残りて蘆の角
梅ふふむ天地の気をたつぷりと
ながらへて靨つやます春日かな
春月や振子にのりて夢の国

近藤 喜子

下萌や野の耳たぶを見つけたり
東帝に山彦やはらかく応ふ
梅東風や玄武しりぞきたる黙示
白魚といふより水でありにけり
人すべて悲の器なり桜貝

谷村 幸子

日のさして皮ぬぎすてし猫柳
すべり台にはずむ声して春隣
雲切れし山のなぞえや金鳳華
山の辺や野梅の白と緋毛氈
英会話はずんでゐたり雛の間

瀬川 公馨

寶船呵呵大笑の虎のぬし
上空に氷室ありけり寒波くる
節分のかほとししむら馬油かな
斑雪なかば盲いてゐたりけり
フルートとマリンバの脇蒼鷹

槐市集

岩下芳子

祝公鑿さん

春光や画伯受賞の金メダル
走り根の猛猛しきや春の雪
行衣すでに焦げ跡ありし紙衣かな
立春の朝のニューウエーブかな
水仙の海辺にあれば海の色

岩月優美子

エネルギー振り絞る二月の夕日
血は続き続けてバレンタインの日
観梅やシンセサイザー鳴り出しぬ
大樟の右も左も冴返る
オーロラの夢より醒めし余寒かな

宇田喜美栄



漬物の蘊蓄ばなし笹子鳴く
初東風は彼の世ひとの世繋ぎけり
吹く風に石山寺の梅ふふむ
影像の胎児の笑ひ花の春
ニヶ月や音なく濡るる雨の朝

江島照美

黒髪に霞ふはりと野外劇
粕汁の匂ひこぼるる鄙の宿
三輪車残されしまま冬終る
臘梅の朽つる寺より匂ひくる
節分や居ぬ幸せもある時間

槐集

高橋将夫選

転生は龍になりたし春の宵
飲み干して魔性になりし寒の水
末黒野や我が身を焦がすことも無く
琴の音のころがつてくる春の膝
啓蟄や雨気孕む風生れにける
客観と主観男雛と女雛かな
ぬけぬけと秘め事明かし亀鳴ける
竜天に春画抱へて登りける
どうしても摘み残されるつくしんぼ
踏青や娑婆の迷子となりにける
春告鳥雲湧く峰を抜けて来し
野遊びの子の鳥になり草になり
雲を追ふ神馬の尻尾春の泥
濃き影を曳きし背中の冴返る
春帽の子の拝みをる狐神

寝屋川 前田美恵子

守口 柳川 晋

京都 竹中 一花

紅梅の枝まで酔うてゐて紅し
沼杉の気根によきによき春の空
山水の景色の中の雛かな
一力の角曲りくる春時雨
漢方の黒き一粒春の風邪
涅槃の日けものの檻は空つぽに
明日はどうするじつとしたままの田螺
肉じやがにフォーク陽炎ゆれてをり
春水のきらめき華麗なるロンド
踏みしめる砂丘の鼓動春の雪
竹林の羅漢大笑春隣
胎蔵界風もも色に春立てり
光琳の水匂ひくる梅の花
吾ここに三世十方臚なり
立春大吉釉葉沁みる深緑

守口 岩下 芳子

高松 大山 里

枚方 富松 寛子

銀河往来 高橋将夫

◇「槐集」 観照

転生は龍になりたし春の宵 前田美恵子
もし生まれ変わるものなら、龍になりたいという。願望だから何でもいいわけだが、「龍になりたい」という心意気に感じた。しかも、「春の宵」という抒情的な雰囲気の中で「龍」が出てくるのだから尋常でない。ちなみに、もう一句。

〈末黒野や我が身を焦がすことも無く 美恵子〉

竜天に春画抱へて登りける 柳川 晋

季語が「竜天に登る」だから春分のところ。万物生動する春だから春画が出てきても不思議はないが、「竜が天に登る時、春画を抱へていった」という発想に脱帽。「竜淵に潜む」という秋の季語もある。しかし、春画は淵に潜んで見るより、天上で見る方がおろからで、作者は天上で見るタイプ。ちなみに、もう一句。

〈客観と主観 男雛と女雛かな 晋〉

野遊びの子の鳥になり草になり 竹中 一花
野遊びをしている子供たち。手を広げて走り回ったり、時には草に伏せたり、自由奔放に遊んでいる。そんな子供たちを、「鳥になり草になり」と描写した。実にユニークで、新鮮な躍動感の有る表現だと感心させられた。

紅梅の枝まで酔うてみて紅し 岩下 芳子
梅の枝は横枝から細い枝が真っ直ぐに空に向かって伸びている

が、花に包まれて全体的にはやわらかに見える。そんな紅梅を見てみると、まるで酔っているようで、枝まで酔って紅に染まっで見えるという。事実、ある時期の紅梅の枝の内は薄紅色だそ

うだ。

明日はどうするじつとしたままの田螺 大山 里
動かない田螺に、「明日はどうする」と聞いている姿がほほえましい。田螺を見ていて「明日はどうする」などという発想はなかなか出てこない。それが出てきたのは、実は「明日はどうする」こそ作者自身の切実な思いだったからだろう。

吾ここに三世十方臚なり 富松 寛子
「三世十方」は三世と十方で、無限の時間と空間を言う。全てが臚なのだ。闘病中の作者はそんな中に厳然と存在する自分自身を見つめている。

もうすこしアンモナイトである朝寝 中野 京子
春眠暁を覚えずで、春は朝になっても心地よい眠りでなかなか目が覚めない。朝寝である。貝のように眠るというが、アンモナイトとは恐れ入った。夢の中で太古の世界でもさまよっているのであろうか。

豆囃みて朝は春と思ひをり 西村 純太
節分は立春の前日。節分には豆まきの行事が行なわれるが、豆をかじりながら冬から春への季節の移り変わりを感じている作者がそこにいる。ちなみにもう一句。

〈直面に一枝の梅の寂光かな 純太〉